

〈プロローグ〉

とき せいれき 2025年。日本は空前くうぜんのプログラ
ミングブームによって国民の三人に一人が
プログラマーある或いはそれを志望しぼうする学生で
あふあふ溢れていた。ビジュアルスタジオ2025は
Visual Studio
今、最も使われている統合開発環境とうごうかいはつつかんきょうである。

作品 No.02

ビジュアルスタジオラーメン

「Visual Studio Advent Calendar 2015」(書き下ろし)

2015年12月24日(太平洋標準時)

「加藤さん」

「はむ」

「何食べてるの」

「サンドイッチです」

「ラーメン屋のバイトなのにお昼にサンドイッチ食べるんだね……」

「何か」

「いや……いいんだ。それよりちよつと話が。サンドイッチ食べてからでいいから」



「実は……今月いっぱいで辞めてもらいたいんだ」

「そんな」

「本当にごめん」

「なぜですか」

「加藤さんもう知ってるとは思うけど……。駅向こうの新しいラーメン屋のせいでお客さんがかなり減へっちゃってね。このままだと店が立ち行かないから……」

「私か店長のどちらかが辞めなければいけないと……」

「君がだ」

「じゃんけん」

「君、調理できないだろう」

「店長だって注文取れないでしょう」

「それは……いや、取れるよ」

「だからこのお店には……二人とも、絶対に必要なんです」

「取れるって……」

「店長。簡単に諦めあきらちゃダメです。考えましょう？ 私たちの大切なお店を、『ビジュアルスタジオラーメン』を守る方法を」



「ラーメン屋さんにお客が入らないということは、ラーメンに問題があると思うんです」
「加藤さんは大体いつも酷ひどいよね」

「では店長。ラーメン作ってみてください」

「できたよ」

「ふむ。…思ってたんですけど、これ『ビジュアルスタジオラーメン』じゃないですか」

「そうだね。『ビジュアルスタジオラーメン』だね」

「……どこですか？」

「良い質問だね」

「どう見ても一般的な普通の塩ラーメンじゃないですか」

「……ネーミングに特に意味はないんだよ」

「流行りに便乗しただけでしょう？」

「その通り。その通りなんだけどね、僕昔プログラマーだったんだ。で、転向してラーメン屋始める時に勢いでね」

「なんでプログラマー辞めたんですか？」

「膝に矢を受けてしまっただけ」

「ちゃんと答えてください」

「加藤さんは結構厳しいよね……こんなにもプログラマーが一般的な職業になるとは思ってたなかったからね、個性が失われるのが恐くてやめたんだよ」

「へえ」

「えっ、自分から聞いておいて……まあいいけど……そういえば君も三年ぐらい前までプログラマーだったよね」

「ええ」

「なんで辞めたの？」

「今更訊いまさらきくんですか店長。どうして面接めんせつの時に訊きかなかったんですか」
「だってその時は触ふれちゃいけない過去もあると思ってさ……」



「えー：加藤さん、それはマジなの？」

「私嘘うそはつかない主義しぎなので」

「よく訊うたえられなかったね」

「そんな大事おほごとですかねえ」

「いや大事だよー」体ていどこの世界にコンパイルが通らないからって関連する部分のソースコード削除しちゃうプログラマーがいるのよ」

「なんでバレちゃったんですかねえ」

「いやバレるでしょ。バレるよ。普通の会社なら当然でしょ」

「聞いてもまた分からない事でございますし」

「いや聞くんだよ。嫌なら勉強するんだよ」

「納期のうきの間に合わせないとダメですし」

「だからって消すのは常軌じょうきを逸じらしてるよ」

「とにかく私はプログラマーに向いてなかったみたいです」

「面接の時それを知ってたら雇やとわなかったよ」

「そんなひどい」

「ひどいのは君だ」

「でもこの三年間私たち仲良くやってきたじゃないですか」

「もう言葉にできないよ」



「とりあえず改あらためて試食してみましよう」

「もう冷めたろ」

「麺めんも伸びのびびて不味まずいです」

「そりゃそうだろ、作り直すよ、しょうがない」

「いや別にいいです」

「いいのか」

「あんまりラーメン好きじゃないから……」

「君の問題だろ、完全に君の問題だろ」

「まあでもどうあがいても一般的な塩ラーメンですよ。味も見た目も」

「そう作ってるからね」

「これじゃお客さんも飽きます」

「どうすればいいの」

「工夫くふうが足りないです。アイデア勝負の時代です」

「そうかあ……」



「まずは麺です」

「どうするの」

「スパゲッティを使います」

「え、その心は？」

「スパゲッティーコード」

「は？」

「プログラマーなら避けては通れない道です」

「よく分かんないけど」

「しつかりビジュアルスタジオに絡めていかないといけないですから」

「そんなドヤ顔されても、全然だからね」



「麺の次は具をどうにかしていきましよう」

「チャーシュー、海苔のり、メンマ、味玉あじたまの何が問題なの…？」

「いいえそうではありません。今私たちには、全く新しい発想はっそうが求められています」

「材料は？」

「にんにく、ベーコン、生しいたけ、玉ねぎ」

「僕のラーメン全否定ぜんひていだ」

「にんにくはみじん切りにします。ベーコンは薄切りうすきです。生しいたけ三枚、玉ねぎ適量てきりょう」

「元の面影おもかげが全く無いんだけど」



「いよいよラスボスですね」

「スープか」

「あんまり美味しくないので…」

「加藤さんは割と度を越して酷いよね」

「ここまでストレートにフィードバックできるのは私ぐらいですよ？」

「それはそうかもしれないけどね……」

「使うのはこちらです」

「デルモンテ・完熟ホールトマト？塩ラーメンだよねこれ？」

「あとお醤油を少々」

「加藤さん」

「完成です」

「加藤さん」

「店長……もしかして私たち、一つの答えに辿り着いてしまったのかもしれませんが……なんで
しょうか、このフィット感……まるで遠い昔からこの一皿を知っているような……」

「トマトパスタ」

「あー」

「せめて麺めんは戻そうじゃないか」

「あんまり美味しくないのに」

「いやだ！ 麺は残す！ これだけは譲ゆずれない！」

「なぜそこまで麺にこだわるんです」

「それは……ラーメンだから……かな」

「納得できません」

「できないかなあ……」



「いいですか店長、世界というものは日々新しく刷新さっしんされているんですよ。たとえば
アジュールポータルアジュールポータルを見てください。一昔前のイビザイビザとは見た目が全く変わってしまっている
ではないですか。しかし大衆はこれを受け入れています。押し寄せる変化を恐れてはいけない
のです」

「でもラーメンにスパゲッティを使うのは、アジュールポータルでエーダブリューエスを管理

してるようなものじゃないかな……」

「大昔あったアジュールウェブサイトをですか？」

「もういい」

「わかりました、わかりました。では特別ですよ。麺だけ普通の中華麺に戻しましょう」

「ありがとう、ありがとう」

これこそが関東一円にチェーンを展開する『ビジュアルスタジオオコドラーメン』（旧・ビジュアルスタジオラーメン）の、看板メニュー誕生の瞬間であった。

終

※この作品はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空または仮想上の存在であり、実在のものとは一切関係ありません。
※この作品は『野崎まど劇場』の『苛烈、ラーメン戦争』のヒロインです。

Visual Studio とはあまり関係ありませんが、Windows 10 及び Windows Server 2016 よりリモートデスクトップでリモート越しにペン入力および筆圧がサポートされるようになりました。本作品中の絵図は Surface Pro 3 のペンを使いリモートコンピューター上で描画したものです。これによりペンのデバッグに Remote Debugger が不要になるなど大変便利になりました。詳しくは下記記事をご覧ください。

▶ <http://blogs.msdn.com/b/rds/archive/2015/07/22/introducing-pen-remoting-for-windows-10-and-windows-server-2016.aspx>